

丸山文庫楽譜蔵書の調査をひとまず終えて

土合 文夫

はじめに

当時の安藤信廣東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長（現東京女子大学現代教養学部長）から私の研究室に電話があったのは、一昨年（2010年）の1月末ごろだったろうか。電話の内容は、「丸山文庫」が所蔵する専門分野の蔵書については一応の調査が終了したが、かなりの量の楽譜類がまだ手つかずのまま残されている。来年度は（私が）サバティカルの年で多少の時間の余裕はあるだろうし、音楽には多少の関心があるようであるから、楽譜類の基本的な調査を引き受けてはもらえないだろうか、という思いがけない依頼だった。

進もうとする専攻分野の如何にかかわらず、丸山眞男の著作の何冊かは、私の学生時代には、多少なりとも社会的・政治的な関心のある者にとっては（60年代末から70年代初めにかけての学生たちにとっては、社会的・政治的問題に超然としていることなどできたらうか？）必読書のレパトリーの重要な一部をなしていた。私自身も『日本の思想』はもとより、主著の一つである『現代政治の思想と行動』、それに、梅本克己氏などとの鼎談集『現代日本の革新思想』などを、傍線や書き込みでページを黒くしながら、幼稚な頭なりに読み解こうと努めたものだ。それ以降も丸山眞男の著作には折に触れて接してきたつもりなのだが、ことに、数年前に学内に出来たささやかな問題を巡って、認識と判断の指針を得たいと、すがる思いで『現代政治の思想と行動』に含まれた論文をはじめ、かつて親しんだ丸山の著作のいくつかを再読した記憶が新ただったこともあり、また、『自己内対話』に収められた断章などで承知していた丸山眞男の音楽に対する並々ならぬ思いに、手沢の楽譜を通してじかに触れられるかもしれないという期待から、安藤センター長の依頼を喜んでお受けすることとした。

それ以来、一年半ほどの間、火曜日の午後の何時間かを図書館地下の丸山文庫で丸山の残した楽譜と向き合って過ごすことが一週間のスケジュールの大事な一部となった。同じ火曜日に見えられる松沢弘陽先生が絶妙のタイミングで提案して下さるティー・タイムに、恩師である丸山眞男のエピソードをはじめとする先生の興味の尽きない思い出話を伺い、丸山文庫を支えて下さっている佐藤美奈子さん、山辺春彦さん、川口雄一さんとおしゃべりを交わすことが、サバティカル中で同僚と顔を合わせる機会も少なくなった私にとっ

ては何よりの楽しみとなった。

始めのお話しでは、蔵書に対する書き込みの重要なものをスキャンして画像を公開する計画の一環として、楽譜に対する書き込みの状態を調べ、スキャンの必要性をランク付けしてほしいということだったが、今後の基礎資料として使っていただければと思い、蔵書への書き込み調査に倣って、一冊ごとに書き込みのあるページを記録した上で、書き込みの状態を簡単に記載し、注目すべき書き込みについてはできるだけ原文の通りに書き写すこととした。このため、初めは半年もあれば済むと考えていた作業が一年半もかかるという結果となった。

ほぼ当初の予定を終えたので、丸山蔵書の楽譜類についての調査結果を以下に簡単に報告する。

はじめに楽譜類の内訳について概観し、次に書き込みの状態とその内容について述べ、最後に注目すべき書き込みの具体例を紹介したい。

1. 楽譜の内訳について

楽譜の内訳については、東京女子大学図書館が書誌的な情報も含めて遺漏なく作成した目録が公開されるものと思われる。私の調査もこの目録に多くを負っているが、楽譜蔵書の内容をかいつまんで紹介する。

楽譜類として丸山文庫に寄贈された書目は、オペラのリブレット（台本）など、楽譜以外の数点を含めて732点に上る。

楽譜はそのほとんどが、「ポケット（ミニチュア）スコア」と通称される小型版である。日本のもの（全音楽譜版や音楽之友社版など）も散見されるが、最も多いのは、ミニチュアスコアの老舗、ドイツのオイレンブルク社のもの。ただし、イタリア・オペラの総譜など、ポケット・スコアの形では出版されていないものについては、判型のやや大きなものも少なからず含まれる。いずれにせよ、すべて、演奏用の楽譜ではなく、いわゆる「研究譜」(Studienpartitur) に属するものである。

ベートーヴェンに対する丸山の傾倒ぶりからして蔵書中に当然含まれていなければならないはずのピアノ・ソナタの楽譜が一冊も見当たらないので怪訝に思っていたが、丸山文庫を来訪された御長男の彰氏に伺ったところでは、丸山自身と二人の御子息がピアノを嗜んだので、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集は国内版の大きな判型の演奏譜で購入していたとのこと。演奏譜は何らかの理由で寄贈図書中には含まれなかったものと思われるが、同様のケースが他のピアノ曲などについてもあるかもしれない。⁽¹⁾

楽譜類（ことに国外版）には一般書籍のように発行年が記載された「奥付」が付されていないものがほとんどであり、それから推測される購入のおよその時期もはっきりと分か

らないものが多い。ただし、見開きに購入年月日が記入された総譜もある程度は見られるので、その紙質の劣化の様子を記入がないものと比較するなどして勘案すると、総譜の多くの部分は、1971年に丸山が東大法学部を辞し、スコアに向き合うための十分な時間的な余裕を得て以後に購入されたものではないかと想像される。楽譜の多くに見られる徹底した書き込みに要したであろう膨大な労力を思うと、多忙な大学での公務や論壇での活動の傍らでそれだけの時間を捻出することが可能だったとは考え難いという事情もある。

作曲家別のスコアの点数を見ると、いわゆる「クラシック音楽」の重要なレパートリーの分布を反映して、バッハから後期ロマン派に至るドイツ・オーストリア系の音楽家の作品が圧倒的な部分を占めている。試みに主な作曲家別に冊数を示せば、バッハ：42、ハイドン：30、モーツァルト：121、ベートーヴェン：67、シューベルト：21、シューマン：17、ブラームス：36、ワーグナー：20、ブルックナー：14、マーラー：12。

バッハについては、網羅的なコレクションとは言えないまでも、主要な曲種はほぼカバーしている。中でも、『自己内対話』中の「私が心から尊敬する曲」と題された断章で筆頭に挙げられた(262ページ)『マタイ受難曲』のスコアは、歌詞の(おそらくは丸山自身による)日本語訳を含めた詳細な書き込みで際立っている。ただ、バッハの器楽曲中、質量ともに最重要の位置を占めるオルガン曲やチェンバロ曲の楽譜が一点ずつしかないのはやや寂しい。ことに、ベートーヴェンのピアノ・ソナタとならんで鍵盤(ピアノ)音楽の最高峰と目される『平均律クラヴィーア曲集』が見当たらないのはどうしてだろうか⁽²⁾？

楽譜蔵書中、作曲家別の点数が最も多いのはモーツァルトである。声楽曲、器楽曲にわたって重要な曲はほぼ網羅しており、丸山のモーツァルトの音楽に対する深い愛着を窺わせる。ただし、ベートーヴェンの場合と同様、ピアノ・ソナタが欠けているのは、演奏譜の形で購入されたためだろうか⁽³⁾。

スコアの点数から見る限り、丸山の声楽曲に対する関心は圧倒的にオペラ(それに、宗教曲)に注がれていたように思われ、シューベルトに始まるドイツ歌曲に対する興味はさほど大きくなかったように見えるが、シューベルトの『冬の旅』は別格だったとおぼしく、譜面には丸山自身による見事な日本語訳が全篇にわたって書き込まれている。丸山は「もともとは文学部の独文科に行きたかった」と述懐することがあったとの由だが⁽⁴⁾、他ではおそらくあまり窺うことができない丸山の文学的な側面を知るために貴重な資料の一つと思われるので、そのなかの数篇を後に紹介することとしたい。シューベルトの歌曲には、いわゆる『三大歌曲集』以外にも傑作がひしめいているのだが、その多くが丸山の耳に届かなかったように見えるのは惜まれる。

丸山が愛憎を込めて強い関心を寄せたワーグナーのスコアでは、何と言ってもほとんどのページごとに詳細な書き込みが見られる『ニーベルングの指輪』の5冊の総譜(『神々の黄昏』は二分冊)が他を圧しているが、ワーグナーを語る上では欠かせない中期の『タン

ホイザー』と後期の『ニュルンベルクのマイスタージンガー』二作の総譜が見当たらないのはどうしてだろうか。

ドイツ音楽に比して、フランス系（パリを主な活動の場とした作曲家も含める）の作曲家は、楽譜の点数から見る限りかなり影が薄いと言わざるを得ない。比較的数量が多いものを挙げても、たとえばベルリオーズの6点、マスネーの5点、オッフエンバックの8点、サン=サーンスの4点などが目立つ程度であり、『自己内対話』に収められた断章の中で「私が死んだときには、このレコードをかけてもらいたい」（260ページ）とさえ書いていた『レクイエム』の作曲家フォーレでさえ、わずかに3点を数えるのみ。フランスの近代音楽を代表するドビュッシーやラヴェルに至っては一点も含まれていない。それに対して、現在の一般的な評価が高いとは言い難いマスネーやオッフエンバックの作品が比較的多いのは、丸山のオペラ（それも、比較的マイナーな作品）に対する偏愛によるものであろうか。

イタリア音楽のコレクションは、ヴィヴァルディの9点を除いて、ほとんどがオペラ作品である。イタリアの近代オペラを代表するロッシーニ、ヴェルディ、プッチーニが、それぞれ8点、11点、4点含まれていることは不思議ではないが、その他に、熱心なオペラファン以外には知られることの少ないベッリーニが4点、ケルビーニが4点、ドニゼッティに至っては9点を数え、しかもその多くに実に熱心な書き込みがなされていることが不思議に思えた。だが、これらの多くが、丸山が愛したというマリア・カラスの主要なレパートリーに属していることに思い至って疑問は氷解した。丸山の愛すべきファン気質をうかがわせるスコア群と言えるだろうか。

ほぼ第一次世界大戦を境目として、初めは教会や王侯貴族、フランス革命以後は富裕な市民層に支えられた、バロック音楽以降のいわゆる「クラシック音楽」は終焉を迎え、それ以降今日に至る音楽は本質的に前代の音楽とは異質のものともみなすべきだという考え方が音楽史家の中では一般的であるようだが、それに従えば、総譜のコレクションから見る限り、丸山の音楽に対する関心が狭義の「クラシック」の範囲を超えることはおおむねなかったと言ってもよさそうである。20世紀音楽の多くが未だポケット・スコアの形では出版されていないことや、巨大化・複雑化した譜面が、素人の手に負えるものではなくなってしまうという事情はあるにせよ、調性の破壊によってヨーロッパ音楽史に革命をもたらしたシェーンベルクをはじめとする「新ウィーン楽派」の作品は（ベルクの『ヴォツェック』のリプレットを除いては）含まれず、バルトークやストラヴィンスキー、ショスタコーヴィチ、プロコフィエフなど、20世紀の音楽を先導した作曲家たちのスコアは、それまでの音楽に親しんだ耳にも違和感の少ない『ベトリューシカ』や『ピーターと狼』などを除いては皆無に近いことを見ると、総じて丸山は20世紀の新しい音楽に対しては拒絶的、あるいは冷ややかな傍観の態度をもって接していたのではないかと想像される。⁽⁵⁾

- (1) この稿を書いた後の2011年12月の半ば、思いがけず、夫人が急逝された後の丸山家を訪問する機会を与えられた。彰さんの御説明を受けながら丸山家に残されている楽譜類(多くはピアノの演奏譜)を見せていただいたのだが、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの楽譜はやはりこの中に含まれていた。ピアノに堪能だったという早世された御次男の思い出のためにご自宅に留め置かれたのではないかと思われる。『自己内対話』中の「私の好きな音楽」と題された断章の中で、第31番作品110をその中に加えていた丸山が(260ページ)、ベートーヴェンのピアノ・ソナタをどう聞いていたのか、大いに興味がそそられたが、中の書き込みまで見せていただく時間的な余裕がなかったのは心残りだった。その他にも、オペラのピアノ譜を含めて百冊を優に超える楽譜が丸山家には残されている模様であり、これらに対する書き込みも今回の調査の「補遺」として記録できる機会があれば、と念じている。
- (2) 『平均律クラヴィア曲集』の国内版の演奏譜も、丸山家に残されていた。
- (3) モーツァルトのピアノ・ソナタ全集(国内版)も同様に丸山家に所在。
- (4) 松沢弘陽先生のお話しによる。参照、松沢・植手通有編『丸山眞男回顧談』(岩波書店、2006年)181-183ページ。
- (5) 『自己内対話』中の「本当に美しさがわからない作曲家」というタイトルの断章には「ドビュッシー、その他メシアンなど大部分の『現代』作曲家」とある(263ページ)。

2. スコアへの書き込みについて

全く書き込みのない130点ほどを除いて、書き込みのあるスコアには、必ずと言ってよいほど、冒頭に調性がドイツ語表記によって記入されている。転調が見られる場合には、その注記もなおざりにされていない。まず曲の性格を規定する調性を確認することが、スコアに向かい合う丸山にとっては自らに課した第一に行うべき儀式的な義務だったように思える。

多少楽器に心得があっても、アマチュアであれば、譜面を音として再現することに追われて曲の分析をなおざりにすることも多いのではないかと(わが身を省みても)思われるし、スコアを参照して曲を聴こうとする熱心な愛好家でも、音楽の展開を譜面の上でたどることで息が切れ、曲の構造にまで思いを致す余裕を持ってないことが少なくないのではないかと想像するが、丸山の総譜に向かう態度はあくまで学究的・分析的である。筆者はもとより楽曲分析(いわゆる「アナリーゼ」)を専門的に学んだ経験はないので(その点では丸山も同様であろう)、丸山による分析が音楽学的にどの程度まで正鵠を射ているものか否かを判断することは残念ながらできない。だが、丸山の時として詳細極まる分析的な書き込みから伺われるのは、音楽的な感動を単に感性の次元に留めず、その所以を譜面によって徹底的かつ客観的に明らかにしようとせずにはいない熱意である。万年筆による丁寧な書き込みに要したであろう膨大な時間を想像すると、ますますその感が深い。

ピアノなどによって譜面を音にしなくとも、スコアだけで脳裡に音楽を響かせることができる能力を身につけるためには、長く集中的な修練を要するはずだが、音楽に対する深い思いの点ではともあれ、アマチュアの音楽愛好家であった丸山には、専門家には求めら

れるこのような力を身に着ける機会はおそらくなかったであろう。丸山は愛聴するレコードやテープを常に実際に耳にしなが、それを譜面の中で確認するためにスコアに向かっていたと思われる。その都度の演奏家の名前や、レコードやテープの A 面、B 面などについての覚えが散見されるのが、そのことを物語っている。それにしても、スコアへの細かな書き込みが演奏の実時間の間に可能だったとは到底思えない。各部分を幾度も繰り返し聴き込み、それを十分に脳裡に焼き付けた上で、演奏時間よりもはるかに長い時間を費やして書き込みを行っていった様子が譜面からは窺われる。

声楽作品、ことにオペラでは、分析的なメモに加えて、歌詞の日本語訳の書き込みが加わる。必ずしもすべての作品に対してではないものの、声のパートがある各ページにぎっしりと書き込まれた歌詞の訳には圧倒される思いがする。簡単な解説だけが付された廉価盤は別として、かつての LP レコードのオペラ全曲盤には、レコード会社が腕に撚りをかけて製作した豪華な解説書が附属するのが習わしだった。丸山はもちろんこのような解説書に含まれた歌詞の全訳も参照したことであろう。一般の翻訳の例に漏れず、オペラのリブレット（台本）の訳文も、日本語としての読みやすさのために原語の語順には厳密にこだわることをせず、場合によっては大胆な意識もためらわないことも多い。これに対して、譜面に丸山の手で書き込まれた歌詞の訳文を見てゆくと、ほとんどの場合、原詩の言葉に逐一忠実に対応したものであることに気付かされる。しかも、通して読むと、逐語訳では多くの場合避けがたいぎこちなさや生硬さがほとんど見られず、一貫した文体を持った流麗な日本語になっていることに驚かざるを得ない。丸山は、原詩の言葉とは微妙に位置がずれてしまうことの多い既成の訳文を嫌い、今この瞬間に歌われている歌詞の内容を確認するために、自身の手によって逐語的な日本語訳を作成したのではなからうか。お手のものだったはずの英語やドイツ語（それに若き日にアテネ・フランセに通って習得したというフランス語）による歌詞はもちろんのこと、数多いイタリア・オペラのスコアにも同様の正確で美しい逐語訳が付されていることを見ると、丸山は愛していたイタリア・オペラを原語によって直接味わうために（秘かに？）イタリア語も独習していた可能性が高いのではないかと思われる。

一年半にわたってスコアの書き込みページを記録するような機械的な部分の多い作業を続けていると、索然とした気分になることもなくはなかったが、それを救ってくれたのは、時として現れる、丸山の肉声を聞くような所感・所見の書き込みだった。その多くは演奏家についての丸山の感想なのだが、中でも、フルトヴェングラーに対する（場合によっては留保を含みつつも）深い畏敬を窺わせる言及や、マリア・カラスについての手放しと言ってよい礼賛の言葉が記憶に残る。書き込みから見る限り、少なくともこの二人の演奏家は、丸山にとっては別格の存在だったようである。

最後に、総譜のほとんどには、見開きのタイトルページの右肩に、美しい筆記体で M.

Maruyama というサインが書き込まれていることを挙げておきたい。松沢先生に伺ったところでは、その他の蔵書ではこのようなサインを見かけた記憶はあまりないとのこと。丸山にとって音楽が本来の仕事の領域とは切り離された特別な世界だったことを物語る一証左であろうか。

3. 書き込みの具体例

楽曲分析にかかわる書き込みについては、譜面に密着したものであり、それだけを抽出することが難しいこと、アマチュアの立場からの分析が曲の新しい知見に結びつく可能性はあまり大きくはないと思われることなどから、いずれ公開されるであろう譜面の画像データに委ねてここでは割愛し、以下では、丸山自身による歌詞の日本語訳、曲や演奏についての所感・所見などのなかから、特に印象に残ったものを紹介したい。

A. 歌詞の日本語訳

書き込みの量で圧倒するは何と言ってもオペラのリブレットに付された日本語訳だが、その中から一部分のみを抜き出すことは難しいこともあり、ここでは丸山の文学的な言語感覚がよく窺える、ヴィルヘルム・ミュラーの詩による『冬の旅』の日本語訳の中から、数篇を選んで紹介する。丸山の翻訳が、原文に対する逐語的な忠実さと日本語文としての流麗さを両立させている様を知っていただくために、原文との対訳の形で掲げる。なお『冬の旅』は、『自己内対話』中で「私が好きな曲」として挙げられた十数曲の中に唯一含まれた歌曲作品でもある。最後に挙げた「道しるべ」の原詩の最後の部分が『自己内対話』には取められている（234ページ）。丸山にとって特別な意味を持つ一節だったのでろうか。

1. Gute Nacht

(おやすみ)

Fremd bin ich eingezogen,
Fremd zieh' ich wieder aus.
Der Mai war mir gewogen
Mit manchem Blumenstrauß.

見知らぬ人として僕は来たが、
いままた見知らぬ人として出て行く。
五月は、かつては、私に好意をよせていた。
華やかに花を咲かせて。

Das Mädchen sprach von Liebe,
Die Mutter gar von Eh', -

乙女はかつて恋を語り、
母親は結婚のことまで語ったのに…

Nun ist die Welt so trübe,
Der Weg gehüllt in Schnee.

ところがいまや、世は寒々として、
途は雪に覆われている。

Ich kann zu meiner Reisen
Nicht wählen mit der Zeit,
Muß selbst den Weg mir weisen
In dieser Dunkelheit.

僕は旅するにあたって、
旅の日どりも選べない。
この闇のなかで自分で途をさがさねばならぬ。

Es zieht ein Mondenschatten
Als mein Gefährte mit,
Und auf den weißen Matten
Such' ich des Wildes Tritt.

月の影が私を伴侶としている。

真白の雪のしきつめた床（ゆか）に、
けものの足跡を求めよう。

Was soll ich länger weilen,
Daß man mich trieb hinaus?
Laß irre Hunde heulen
Vor ihres Herren Haus;

なぜ、これ以上ぐずぐずしていられようか？
私を追い出そうというのに？
狂犬よ、主人の家の前で勝手にほえるがいい。

Die Liebe liebt das Wandern –
Gott hat sie so gemacht –
Von einem zu dem andern.

恋というものはうつろいを好むものだ。
神がそう定め給うた。
人から人へと愛をうつす。神がそう定め給う
ただ。

Fein Liebchen, gute Nacht!

恋はうつろいを好むもの。恋人よ、さようなら。

Will dich im Traum nicht stören,
Wär schad' um deine Ruh',
Sollst meinen Tritt nicht hören –
Sacht, sacht die Türe zu!

君の夢をさまたげるまい、
君のいこいをさまたげるまい、
君に僕の足音がきこえないように、
そっと扉をしめよう。

Ich schreibe nur im Gehen
An's Tor noch gute Nacht,
Damit du mögest sehen,

去るに当って、君の扉に、
おやすみ（さようなら）と書こう。
僕が君を思っていたことが

An dich hab' ich gedacht.

いつかはわかるように…

(資料番号0198763 による)

3. Gefrorene Tränen

(凍れる涙)

Gefrorne Tropfen fallen
Von meinen Wangen ab:
Und ist's mir denn entgangen,
Daß ich geweinet hab'?

凍りついたしずくが
私の頬から流れおちる。
私には気がつかなかったのか、
私が泣いたのだということが。

Ei Tränen, meine Tränen,
Und seid ihr gar so lau,
Daß ihr erstarrt zu Eise
Wie kühler Morgentau?

ああ、涙よ、私の涙よ、
なぜかくも生ぬるいのか？
凍りつくとは、
冷たい朝霧のように。

Und dringt doch aus der Quelle
Der Brust so glühend heiß,
Als wolltet ihr zerschmelzen
Des ganzen Winters Eis!

しかも、胸の泉から、お前（涙）は
あれほど熱く煮えたぎっているのに、
まるでお前が溶かすかのように、
冬中の氷を…。

(3. 以下は、資料番号0198762 による)

11. Frühlingstraum

(春の夢)

Ich träumte von bunten Blumen,
So wie sie wohl blühen im Mai;
Ich träumte von grünen Wiesen
Von lustigem Vogelgeschrei.

私は夢みた、色とりどりの花が
五月に咲きみだれるさまを。
私は夢みた、緑の野を、
また、楽しげな小鳥のさえずりを。

Und als die Hähne krächten,
Da ward mein Auge wach;
Da war es kalt und finster,
Es schrieen die Raben vom Dach.

そうして鶏がないたとき、
私の目は覚めた。
すると、それは寒く、くらやみで、
屋根にはからすが鳴っていた。

Doch an den Fensterscheiben,
Wer malte die Blätter da?
Ihr lacht wohl über den Träumer,
Der Blumen im Winter sah?

それにしても、窓ガラスに
一体だれが花を描いたのか?
その人はきっと夢見た男を笑うだろう、
真冬に花など見た男を。

Ich träumte von Lieb' um Liebe,
Von einer schönen Maid,
Von Herzen und von Küssen,
Von Wonn' und Seligkeit.

私は愛の夢を見たのだ、
ひとりの美しい乙女への愛のために…。
もえる心やくちづけを夢み、
歓喜と至福とを（夢みた）。

Und als die Hähne kräten,
Da ward mein Herze wach;
Nun sitz ich hier alleine
Und denke dem Traume nach.

（夢やぶれて）鶏が啼いたので、
そこで私の心は覚めた。
いまや私はひとりここに坐して、
その夢のあとを追っている。

Die Augen schließ' ich wieder,
Noch schlägt das Herz so warm.
Wann grünt ihr Blätter am Fenster?
Wann halt' ich mein Liebchen im Arm?

私はふたたび目を閉じると、
まだ胸はあつく高鳴っている。
いつ、窓辺の葉は緑するのか?
いつ私は恋人を腕にいだくのか。

20. Der Wegweiser

（道しるべ）

Was vermeid' ich denn die Wege,
Wo die ander'n Wand'rer gehn,
Suche mir versteckte Stege
Durch verschneite Felsenhöh'n?

なぜ私は
他のさすらい人が通る道避けるのか。
（なぜ）人目につかぬ小径を求めるのか?
雪に埋れた岩山を抜ける小径を?

Habe ja doch nichts begangen,
Daß ich Menschen sollte scheu'n, -
Welch ein törichtes Verlangen
Treibt mich in die Wüstenei'n?

人々をはばかりようなことを
何ひとつ冒していないのに、
何とおろかしのぞみが
荒野へと私を駆りたてるのか。

Weiser stehen auf den Strassen,
Weisen auf die Städte zu,

道しるべが路傍に立って
町の方をさし示している。

Und ich wand're sonder Maßen
Ohne Ruh' und suche Ruh'.

そうして私はさすらう、ひたすらに、
憩いもなく、しかも、憩いを求めて。

Einen Weiser seh' ich stehen
Unverrückt vor meinem Blick;
Eine Straße muß ich gehen,
Die noch keiner ging zurück.

一本の道しるべが立っているのを私は見る、
ゆるぎなく私の眼前に立っているのを。
(けれども) 私はある町へと行かねばならぬ、
そこから帰ってきた者が誰もいない町へと。

B. 所感、所見

丸山が楽譜に書き込んでいる作品や演奏についての所感は数多いが、ここでは、必ずしも楽譜に即さなくても理解可能なものを数点紹介するに留めたい。なお、丸山の愛したマリア・カラスの歌唱にかかわる書き込みは「カラス！」といった感嘆詞的なものがほとんどなので、割愛する。

「チェリビダケの1984年の演奏は、ほとんど全楽章インテンポで押し通す点で、フルトヴェングラーと対蹠的でありながら、内からふきあげるような情熱とパセティックな感じを出して、一音符といえどもけっしてメカニックでない。第二楽章がとくに抜群である。音色の透明なことも驚くほどであり、またホールの残響のひびきのよいことも、効果をあげている。終楽章のコーダがあまりに整然として、もう一つ盛り上がらないのが惜しい。第三楽章トリオのホルンもこれほど^(ママ)美事な和音のひびきは容易にきかれないだろう。」(資料番号0198254 Beethoven: Symphony No. 3 への書き込みより)

「音が一つ一つただ鳴っているのではなく生き物のように動き、躍っている。このF [urtwängler] の特徴は、元来が人間くさいロマン主義の音楽の場合よりは（これはゴマカシがきく）、ハイドンの交響曲などでかえってはっきりする」(資料番号0198495 Haydn: Symphony No.88 への書き込みより)

「解説文の「感動的」という言葉を枠で囲った上で」「あまり何度も出て来ると、まったく「感動的」な文章でなくなる！」(資料番号0198554 Mahler: Symphony Nr. 5 への書き込みより)

「歌詞の内容から大伴旅人の和歌を連想して」「限りなき宝といふも、一杯(つき)の、濁れる酒にあにしかめやも。」(資料番号0198557 Mahler: Das Lied der Erde への書き込み)

より。「価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめやも」万葉集巻第三)

「譜面中、B./W. とあるのはそれぞれベルリン・フィル（海賊版）及びウィーン・フィル（ソニーコロムビア）を戦後ブルーノ・ワルターが指揮した盤を示す。弦の音は海賊版というハンディもあって、ウィーンの方がえん麗であるが、ワルターの解釈は——両者基本的小おどろくほど一貫しているにもかかわらず——ベルリンの方がより鮮明に出ている。これはウィーン+ワルターの場合は両者相互にあまりに意識的になったためか、それともベルリンの方が己れを無にしてワルターの棒にしたがったのか、きわめて微妙な差であるが興味深い。」（資料番号0198584 Mozart: Symphony No.40 への書き込みより）

「『恐怖を知ること成人することであり、眞の人間の英雄になることなのだ』 『『恐れ』を知ってはじめて成人になる = “社会” 的人間となる』（資料番号0198885 Wagner: Siegfried への書き込みより）

「『(もはや良いジークフリートと怪しからぬジークフリートと二人の人格はない。同じジークフリートだ。) →電極のプラスとマイナスのように、善悪対立物の同時の相互作用が人生なのだ。』（資料番号 0198887 Wagner: Götterdämmerung II への書き込みより）

「指輪もワルハラも汚れている。だから、指輪が清められて黄金に戻り、ワルハラも燃えて火による贖罪を受けて、はじめてすべてが解決する。(指輪がラインの乙女に戻ったのに、どうして神々は没落するのか、という疑問が度々提起された。しかし、キリストも贖罪のために死んだのだ。世界の再生のために!）」(同上)

最後に、親交があったというオックスフォード大学の日本研究家、Richard Storry の訃報に接して、丸山がベートーヴェンの弦楽四重奏曲第15番イ短調の五楽章の譜面に書き付けた言葉を紹介して、この報告を閉じたい。

「第5楽章 a moll 第一部 Dick Storry の訃報のあとでこの楽章を涙しながらきく。これはテンポの早さにもかかわらず、まさに葬送行進曲だ。(一九八二年二月二日) 行進曲とってわるければ、葬送のスケルツォだ!」

[付]

丸山文庫に寄贈された楽譜のうち、何らかの書き込みが見られるものを、その密度や内容などを総合して四段階に区分した。以下は、最も高いランクの4（スキャンによる画像ファイルの公開が強く望まれるもの）に分類した42点の楽譜の一覧である。なお、譜面のタイトルは、東京女子大学図書館の作成した目録の表記に従った（後ろの括弧内は資料番号）。

Bach: Matthäus-Passion [マタイ受難曲] (0198235)
Beethoven: 第三交響曲「英雄」(0198254)
Beethoven: 交響曲第五番「運命」(0198256)
Beethoven: 弦楽四重奏曲集 (0198299)
Beethoven: Fidelio [フィデリオ] (0198319)
Bellini: La sonnambula [夢遊病の女] (0198341)
Bellini: I puritani [清教徒] (0198343)
Berlioz: Benvenuto Cellini [ヴェンヴェヌート・チェッリーニ] (0198348)
Berlioz: The damnation of Faust [ファウストの劫罰] (0198350)
Brahms: Ein deutsches Requiem [ドイツ・レクイエム] (0198390)
Bruckner: VIII. Symphonie c-moll (0198422)
Cherubini: Medea [メデア] (0198442)
Giordano: Andrea Chénier [アンドレア・シェニエ] (0198479)
Gluck: Orpheus [オルフェオとエウリディーチェ] (0198481)
Gluck: Orfeo ed Euridice [オルフェオとエウリディーチェ] (0198483)
Haydn: Symphony No.88 G major (0198495)
Mahler: 交響曲第五番 嬰ハ短調 (0198554)
Mahler: Das Lied der Erde [大地の歌] (0198557)
Mozart: 弦楽四重奏曲ニ短調 K.421 (0198651)
Mozart: The complete piano trios (0198662)
Mozart: Idomeneo [イドメネオ] (0198678)
Mozart: Die Hochzeit des Figaro [フィガロの結婚] (0198681)
Mozart: Don Giovanni [ドン・ジョヴァンニ] (0198682)
Offenbach: Die schöne Helena [美しいヘレナ] (0198711)
Offenbach: Tales of Hofmann [ホフマン物語] (0198716)
Puccini: La Bohème [ラ・ボエーム] (0198725)

Rossini: Il Turco in Italia [イタリアのトルコ人] (0198734)
Saint-Saens: Samson et Dalila [サムソンとデリラ] (0198742)
Schubert : Winterreise [冬の旅] (0198762)
Schubert : Die schöne Müllerin, Winterreise, Schwanengesang [美しい水車屋の娘、冬の旅、白鳥の歌] (0198763)
J. Strauss: Der Zigeunerbaron [ジプシー男爵] (0198817)
Verdi: Macbeth [マクベス] (0198839)
Verdi: Der Toubadour [イル・トロヴァトーレ] (0198840)
Verdi: Die Macht des Schicksals [運命の力] (0198843)
Verdi: Otello [オテロ] (0198845)
Wagner: Lohengrin [ローエングリン] (0198875)
Wagner: Tristan und Isolde [トリスタンとイゾルデ] (0198879)
Wagner: ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲 (0198881)
Wagner: Das Rheingold [ラインの黄金] (0198882)
Wagner: Die Walküre [ヴァルキューレ] (0198883)
Wagner: Siegfried [ジークフリート] (0198885)
Wagner: Götterdämmerung [神々の黄昏] (0198886, 0198887)